

創発 Mail Magazine

創発は‘インキュベーション’のプロ集団。-問題解決のための新しい戦略・進化-

当メールマガジンは、日本総研/創発戦略センターの研究員と名刺交換させていただいた方に配信させていただいています。
>> [登録解除はこちら](#)

[日本総研-創発戦略センター](#) | [研究員紹介](#) | [セミナー・イベント](#) | [書籍](#) | [掲載情報](#) | [ESG Research Report](#) |

この度、人生100年時代を真に充実して生きるための仕組み作りをテーマに『CONNECTED SENIORSコンソーシアム2019』を設立致しました。詳細は沢村スペシャリストのコラムをご覧ください。

1. IKUMA Message

[・新しい時代へのエネルギーシステムの整備](#)

2. 創発eyes

[・中国内陸部の発展と課題](#)

3. 連載_ヘルスケア

[・人生100年時代の不安と向き合うために-CONNECTED SENIORS コンソーシアム2019を立ち上げます](#)



創発戦略センター
所長
[井熊 均](#)

IKUMA Message

新しい時代へのエネルギーシステムの整備

9月9日に関東地方を直撃した台風15号により、千葉県は大変な被害に見舞われました。直撃から2週間経った現在でも電気の通じていない世帯があり、住宅等の被害が完全に回復するのが何時になるのか見えていません。

今回の台風の特徴はこれまで経験したことのないような強風です。昨年関西地方を襲った台風でも同じくらいの強風が吹き、大きな被害をもたらしました。こうした台風が毎年のように日本を襲うようになった原因が地球温暖化であることは間違いありません。今後気温上昇が続くことを考えると、今回と同様あるいはそれ以上の台風が直撃することを常態として、国民生活の基盤であるインフラを見直す必要があります。そこで、二つの点を指摘したいと思います。

一つは、我々需要者が、インフラの機能を維持するにはこれまで以上の負担が必要になる、という事実を受け入れることです。電力システムでは、送配電網が現状の設計値を大幅に超える強風に耐えるようにするには、設備の強度を上げるか地中化を図るしかありません。そのために、どのくらいのコストが必要になり、利用者の負担がどのくらい増えるのか、が冷静に議論されなくてはなりません。

もう一つは、地球温暖化の被害が本格化する時代に向けて、インフラの在り方を再検討することです。電力では、巨大な発電所と広大な送配電網により需要家に電力を届ける、大規模集中型のシステムが建設されてきました。それが社会の発展を支えてきたことは間違いありません。しかし、今回房総半島の南端部の復旧が遅れたことは大規模集中型システムの課題を示していると考えます。人口減少が続く中で広大な送配電網の維持は一層難しくなります。新しい時代に対処するには、各地域で電力の自立的な供給力を高める分散型エネルギーシステムの整

備が必要になると考えます。

自然の猛威が増す中で人口減少が重なるという難しい時代、インフラの維持には新しい発想と合意形成が求められています。



創発戦略センター
マネジャー
程塚 正史

創発eyes

中国内陸部の発展と課題

2019年7月、中国政府の高等研究機関である中国社会科学院の招きで、中国内陸部の甘肅省各地を訪問した。これは、日本の外務省および日中友好会館の尽力によって実現した両国間の若手研究者の交流を図る取り組みの一環として行われたもので、甘肅省訪問前には北京において中国側研究者や党・政府の方々とも意見交換の場を持たせていただいた。

日本で暮らしていて、甘肅省と聞いてピンと来る人は多くはないだろう。中国に住んでいた経験があり、現在も頻繁に北京や上海などを行き来している筆者自身も、甘肅省に行く機会は今回が初めてだった。ホスト役の社会科学院は、日本の研究者に内陸部を視察してもらうのは「総合的な中国のイメージをつかんでもらうため」だと説明してくれた。沿岸部を中心に中国は急速な発展を遂げているが、内陸部は状況が違うという側面を共有したいとのことだった。

実際、甘肅省の各都市や農村を訪問すると、大都市では見られない課題、むしろ日本の地方と共通するような悩みがあることが感じられた。本稿では、その際の気づきについて一部レポートしたい。なお、ここでの内容はあくまで視察から得られた印象であって、一部正確性に欠ける恐れがあることをご容赦いただきたい。

甘肅省は、中国の所得水準ランキングで、チベット自治区、ウイグル自治区、貴州省に次いで貧しい地域だ。東西に細長く、洛陽から西、ウイグルより東のシルクロード沿線を管轄している。今回の視察では、省都の蘭州市、その隣の武威市、そこから800km北西に向かって、万里の長城の西端でもある嘉峪関市や酒泉市、およびそれぞれの周辺地域を訪問した。

第一印象として、従来抱いていた内陸都市のイメージよりも整備の進んだ街というのが正直な驚きだった。各種インフラは、すでにかなり整備されている状況と感じられた。道路インフラや街区整理については、かなりの地方都市である武威市や酒泉市、嘉峪関市などでも、少なくとも表通りの見た目としては大都市と遜色ない様子といえた。蘭州市の黄河のほとりに立つ高層ビルのネオンは香港のようだった。通信インフラも2020～21年には5Gが整備予定とのことだった。風力発電の適地でもあり、郊外の砂漠には至る所に大規模風力発電施設や高圧線網が見られた。

訪問先では、各種の産業振興策が相当に講じられていることも感じ取れた。農業は、厳しい乾燥に負けない生育施設や設備が導入されつつあり、むしろ過酷な条件を活かした糖度の高い果実の生産に成功し始めているようだった。農村周辺では深刻な砂漠化への対策も数十年かけて着実に進み、貯水池や水路の確保に成功する地域が増え始めていた。鉄鋼事業者など大手国営企業は、地場製品の育成、例えばワインの高品質化への取り組みを進めていた。遺跡を活かした観光産業も近年伸びつつある様子だった。

このように、インフラの整備、一次産業の振興、二次から三次産業への転換が同時進行で起きている様子がうかがえた。外国からの訪問者に対してという特殊要因を割り引いたとしても、政府、企業、農地等の関係者それぞれが、前向きに力強く近い将来の目標や夢を語っていたのが印象的だった。

一方、もちろん全てがバラ色の未来というわけではなく、様々な不安材料も散見された。道路インフラは整然と整備されてはいたが、将来の需要増を見越した

整備であり、公共投資による経済振興の先食いという感もあった。鉄鋼事業者などは次世代の事業を模索しているが、逆に言えばそれは鉄鋼がすでに生産調整を受けるほどの斜陽産業だからであり、代替事業の発掘が急務という面もあると思われた。鉄に代わる事業が育たなければ、都市が丸ごと沈没する恐れも感じ取れた。このような構造転換は、日本含め多くの先進国の地方部がかつて経験したことだろう。

紙幅の関係で書ききれないことが多々あるが、以上が甘肅省という中国の地方部を訪問してのたまかな所感となる。今後どのような経緯をたどるのか、引き続き注視したいと同時に、ここで得られた身体的な感覚を、日本企業はじめ多くの方々の事業機会につながるよう努めてみたい。

今回は短期間で、中国の中央、省、市、鎮といった各級政府や企業の方々と情報交換することができたのは貴重な経験であった。末筆で恐縮ながら、視察を受け入れてくださった皆さん、何より複雑な行程をご調整いただいた中国社会科学院、日中友好会館の皆さんに、心より謝意を表したい。



創発戦略センター
スペシャリスト

[沢村 香苗](#)

ヘルスケア

人生100年時代の不安と向き合うために-CONNECTED SENIORS コンソーシアム2019を立ち上げます

日本総合研究所では「超高齢社会における国づくり」をテーマに、未曾有の超高齢社会において、一人ひとりが生き生きと暮らせる社会の仕組みづくりを目指した政策提言、産業創出・活性化の支援を行っています。このたび創発戦略センターでは「CONNECTED SENIORS コンソーシアム2019」を立ち上げ、人生100年時代を真に充実して生きるための仕組み作りに向けた活動を開始しました。

人生100年時代という言葉はもはや使い古された感もあるほど、私たちの生活にあふれています。この言葉を聞くと、皆さんは何をお感じになるでしょうか。そう聞かれても100年というのはあまりに長い時間で、ただなんとなく不安になる、という方が多いのではないのでしょうか。

一人ひとりで見ると、私たちは何歳まで生きるかわかりません。しかし、平均的に見ると高い確率でとても長く生きることが分かっています。さらに、これまで人生を規定してきた、血縁、地縁、社縁といった枠組みは徐々に姿を消しつつあります。長い人生と少ない規定要因は、私たちに大きな自由を与えます。一方で、今していること、これからしようとしていることが適切なかどうかを判断することはとても難しくなります。何を、何のために、いつすべきかわからないという不安が、人生100年時代の課題だと私たちは考えています。その意味では、人生の長さよりも、枠組みの消失の方が大きな問題なのかもしれません。

人間が自由を手にした時、必ずしもよいことばかりが起こるわけではないという指摘もあります。「自由からの逃走」（エーリッヒ・フロム著）は1941年に出版された本です。人間が既存の枠組みから自由になったとき、どのようなことが起こったか、全体主義の勃興と関連付けて語られています。その中にはいくつも、今身近に起こっていることにそのまま当てはまるような記述がみられます。

自由から発生する不安に私たちがきちんと対峙し、よい答えを出し続ける仕組みとして、コンソーシアムではサイバー空間での「自己対話」に着目していきます。自分にとって本当に意味のあることは何か、どんな自分でありたいのか、日々の小さなことから大きな決断まで、自分に対する問いかけを忘れずに、楽しく行い続けることが、人生100年時代を充実して生きるための道筋であると考えます。その中核として日本総研が提唱するのが、サイバー空間に自分自身の情報を再現する、デジタルツイン「subME」です。subMEは対話を通じて個人に気づきを与え、自ら動機を持って行動することを支援します。同時にsubMEは、対話からの情報をサイバー空間に蓄積します。subMEは蓄積した情報を活用して、新たな仲間や専門家とのコミュニケーション機会を提案します。

また、個人が虚弱化し意思疎通が困難になった時には、それまで蓄積した情報を支援者と共有し、その個人らしさを尊重した判断を周囲が行うことを助けます。

CONNECTED SENIORSという名前の通り、私たちはまず高齢者を主役に、この自己対話の仕組みをサービスとして作り上げたいと考えました。それは、「人生100年時代」という新たな課題のリアリティを今最も感じているのが高齢者だからです。高齢者が自己対話を出発点として自分や周りとうまくCONNECTすることで、皆が負担なく支え合い、満たされて生きることが可能な社会を創り出すことが我々の目指すゴールです。

この連載のバックナンバーは[こちら](#)よりご覧いただけます。

株式会社日本総合研究所 創発 Mail Magazine
(第2・第4火曜配信)

このメールは創発戦略センターメールマガジンにご登録いただいた方、シンポジウム・セミナーなどにご参加いただきました方、また研究員と名刺交換した方に配信させていただいております。

【発行】 株式会社日本総合研究所 創発戦略センター
【編集】 株式会社日本総合研究所 創発戦略センター編集部
〒141-0022 東京都品川区東五反田2丁目10番2号
東五反田スクエア

TEL：03-6833-6400 FAX：03-5447-5695

<配信中止・配信先変更>

<https://www.jri.co.jp/company/business/incubation/mailmagazine/privacy/>

※記事は執筆者の個人的見解であり、日本総研の公式見解を示すものではありません。

Copyright (C) 2019 The Japan Research Institute, Limited.